オリオペ短編集

神仙神楽

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルの通り、特定のキャラクターと深いかかわりを持つオリジナルオペレーターの絡みを描いた物語。

ドクターＬＯＶＥ要素が大きく失われているので注意です、そして自己満足。

目次

勿忘草、二輪（ロスモンティス）　1
海咲きの勿忘草（スカジ）　――――　7
危機契約モデル＃１…序盤三重奏　13
喧噪の掟＃０…太陽偲ぶ月（グラニ）　21
危機契約モデル＃１…中盤四重奏　29
危機契約現行…間奏　――――　40

勿忘草、二輪（ロスモンティス）

移動都市「ロドス」の甲板からぼんやりと空を見る。視界に入るのは一日の終わりを告げる赤い陽。小さく風に吹かれ、鈴の音が耳元で聞こえた。

ただ一つに限り並以上にこなせる事柄からエリートオペレーターとして任命された我に、平時の居場所は存在しない。一日が始まれば四方の他移動都市連結路を見回り、一日が終われば甲板に準備された離れで過ごす———そんな毎日を繰り返していた。

「…あぁ、今回は此処にいたんだ」

首だけで彼女の方へ振り返る。

戦闘時につけているユニットを外しているからか、さらに小柄に見える幼いフェリーンの少女ローズマリーが居た。

「どうした、ロスモンティス？」

「ケルシー先生が”定期診断だから離れに戻ってきてほしい”って、カーナ———」

「スワラチカ、だ。少なくとも、職務中はコードネームで呼んでくれ」

…そうだっけ？と透き通るような声で彼女が呟き、紙のこすれる音が微かに響く。とあるところでこすれる音が無くなり、その見開きを見た後に小さく「ごめん、忘れてた」

と謝られた。
「まだ夜勤と変わっていない故、細かいかもしれないが…規則だしな」
「うん。…スワラチカ」
首を傾げながらも、ローズマリーに話を促す。
「スワラチカは、離れに1人で暮らしてるけど…寂しく、無いの？」
「寂しくない、と言えば嘘になるが――――この体質では仕方ない。アーツのように”制御できる”代物でもない以上、入るわけにはいかないのは分かってる」
「…私が、離れに住むのは――――」
「冗談でも、それを言うな」
彼女が頬を膨らませる。
だが、こればかりは譲るわけにはいかない。彼女が皆を家族と思っている事は、エリートオペレーターとして互いに自己紹介をしたときに知っている。家族が同じ家で過ごすという考えから、我を離れから艦内の居住施設ローズマリーはどうやら艦内を家と認識している節があるらしいに移したいと考え付いたのは一度や二度ではなかった。
それを断り続けたら、次は彼女自身が離れで生活すると提案することが多くなった。だが、我が物理的に艦内から引き離されている原因を考えると好ましくない。
頬を膨らませていた彼女が、小さく息を吐いた後隣に座る。…しばらく夕日が沈むの

を眺めていると、ローズマリーが来た方向から潜めた足音が聞こえた。
「…見回り、お疲れ」
「夜勤はグレースロートか」
リーベリの少女――――が頷く。ケテルと関わる前はロドスから逃げるように遠方の任務を好んで受けていたが、今ではロドスで過ごす時間が増えている。ケテルが巧くやっているのだろう。
「では、任せた」
「じゃ、朝になったらよろしく」
「分かっている」
短くやり取りをし、離れへと向かう。その隣をローズマリーが小走りで付いてくるので、彼女の歩幅にあわせる。…随分と物好きな事だ、何の面白みも無い我に用も無くついてくる位なら彼女自身の為の時間を取ったほうが余程建設的だというのに。
だが――――悪い心地はしない。

コードネーム名、スワラチカ。…カーナとは、実のところかなり昔から交流していたらしい。らしい、というのは私自身がその事を覚えていないから…なんだけど。
彼はエリートオペレーターの中で異端と、職員たちから悪い意味で注目を集めてい

た。というのも彼自身の鉱石病と制御の儘ならないアーツの組み合わせによって、日常生活を一般的な設備で送ることができないから。

だから外の離れで生活をしている。…それもあって、ロドス内のエリートオペレーターの中では一番職員に嫌われていた。それこそ例外を言うのであれば、同じエリートオペレーターたちとケルシー先生、グレースロートさん位。…本当は皆が仲良くしてほしいけど、それも難しい事は過去の私が実証済みだった。彼と皆の溝は…思っている以上に深いらしい。

隣で歩いていると私のほうに流れないよう、彼が自身の髪に手を当てる。その際に響く金属が研がれる音。

彼の感染は硬ケラチンを主成分として作る物、髪の毛や爪が源石化すると言う物で。それが彼自身のアーツ彼は鋭利化でケルシー先生は刃化と呼んでいる。有効範囲は接触した物質から半径１ｍ少しで周囲を無差別に斬りつけてしまう。

初めはエリートオペレーターである彼が嫌いだった。家族である皆が、彼を嫌っていたから。記録を見る限り１年前――――エリートオペレーターに私がなるまでは少なくとも。

でも、ケルシー先生が「彼は皆の事が大事だと思っている。当人が当人を皆より嫌っている」と言った時から。彼を目で追い、観察するようになって。彼の事だけを纏める

専用の記録まで作るようになって、漸く分かった。
「…スワラチカ」
「カーナでいい。夜勤と変わった事で職務は終わった故な」
「ん。カーナは優しいよね、誰に対しても。グレースロートさんも、カーナを信じてた」
そして、その優しさは”傷つける事しかできない自己との対比”で齎されている。彼はエリートオペレーターの中で近接戦に限れば最強、しかも兵器にすら相当できる。
然し彼はそれしかできないと卑下し、それを事実として受け止めてしまっていた。
「そうだろうか。我には、これしかできない故よく分からないが」
ほら、また卑下してる。でも――慰める事は、出来ない。頭を撫でようとしたら過去に手を切った事があったらしい。…その時の記録には、最後に一文。
”触れてはいけない。触れたら、私も。彼も傷ついてしまう”
何があったのだろう。
この事をカーナには聞けず、ケルシー先生も黙って首を横に振るばかり。この時は、私自身の忘れっぽい精神症状を恨んだ。
彼のやさしさ――自己との対比によっておこる歪なそれに気付いて。何故か、とても泣きたくなった。
それから、何時からだろう。

彼から、眼を離したくなくなったのは。彼の事だけは、忘れたくないと。彼を忘れることに、恐怖を覚えるようになってしまったのは。

海咲きの勿忘草（スカジ）

ケルシー先生からの診察を終え、ぼんやりと壁を見る。

歪んで3層に生えた爪と地面に着くまで伸びきった髪。ケルシー先生曰く”アーツの暴走アーツの制御ができない症状。アーツを限界以上に駆使し続け、鉱石病のステージが非常に速く上がり死に至る。本来なら此処まで源石を含有していると死亡しているらしい。で鉱石病が進行し続けているから仕方ない”とのこと。

…もう一度、我の制御下に存在しないアーツの特性を反芻する。

我が鋭利化、ケルシー先生が刃化と呼ぶそれは有効範囲が［接触した物質から半径1m付近］となる。これはあくまで［平時］であり、一度感情に任せて暴発した時は目も当てられない事となった。

効能は「範囲内に存在する無機物／源石の鋭角を刃とし、切れ味を向上させる」「前述した対象を金属的な特性に変質させる」といういたってシンプルな物。後者の性質のお蔭で体力が少なくとも物理的な強度が高くなっている。

切れ味の向上においては引き摺った髪の毛1本1本が地面に突き刺さり抉る程度。鉄であれば火花を上げながら不快な金属音と鉄の灼ける匂いが漂った程。最大の特徴

として［アーツを付与された無機物／源石は他のアーツからの干渉を受けない］事。
これについてはメリット／デメリットが大きい。先ずはメリットとして「術師の攻撃を無効化できる」事。但しアーツそのものをエネルギー体としてぶつける場合のみであり、アーツの福産的効果アーツの炎で倒壊してくる瓦礫等は無効化できない。
そしてデメリットは「治療オペレーターの回復を受けられない」事。一般的な治療であれば受ける事ができるが、アーツによる治療は無効化の対象となってしまう。
この性質が髪と爪に付与されるという事は、身だしなみですら結構大変で。だからこそ
「こんばんは、カーナ。えらく伸びたわね…」
「こんばんは。早速ですまないが、頼んでもいいか？」
――それをぶつ切りに出来る程の武器と怪力を持つ女性、スカジを頼っていた。
「えぇ。前と同じぐらいの長さね？」
頷き、髪の毛を剣で斬りやすいように横になる。直後、複数の鉄糸を斬ったような音。床には新しく1本の跡が刻まれるが――今に始まった事ではない。
「…次は反対側ね」
頷き、反対に向く。再度響く音。
「助かった」

「またあれと戦う時に返してくれればいいわ。貴方なら私の傍で戦えるから、ね」
「その時は必ず」
…何か他用でもあるのだろうか？普段ならこれで彼女は宿舎に帰るのだが…首を傾げながらも、彼女と目を合わせ続ける。
普段被っている黒のハットは着けておらず、薄暗いランタンの中でも輝く白髪。ローズマリーと比べると健康的な白い肌と、垂れ目の内にある火の灯に近い赤い瞳。整った顔立ちは、口調に反して幼く可愛らしいと思う。
暫くすると白い肌が赤みを帯び、小さくそっぽを向かれた。
「…その、見つめられると…恥ずかしい、のだけど…」
「すまない。普段はこれで別れていた故、残っているのが不思議でな。他に何かあるのか？」
「…そう言えばそうね…今日は此処間借りするからよろしくね」
…その時我は間抜けな顔をしたと思う。彼女が面白そうに、笑っていたから。

寝転がったまま珍しい表情をした彼――――カーナとは、2年ほど前から付き合いがある。私と同じように、自身のせいで傷つく事を恐れている彼とは恐ろしいほどに波長が合った。

「…初めて聞いたんだが」
「そうね、初めて言ったもの」
　とはいう物の、これには事情がある。
「単独任務が予定より早く終わったのだけど、それが災いして宿舎が空いてなかったのよ。だから間借りしようと思ったのだけど…」
　彼の反応はあまり芳しくない。
「…一つの屋根の下というのはな。少しばかり、気恥ずかしい」
「あら、そう？」
　初めて知った。ロスモンティスと一緒に居る様子からは思えない言葉に小さく目を見開く。
「事実、初めてだしな。だが、スカジなら問題はないか」
「…それはどういう意味かしら？」
「スカジが我を傍に置いて戦えるというように、我もスカジであれば安心できる。我のアーツの暴走を気にせず傍にいてくれる、唯一のオペレーター故」
　…何処か、落ち着いたような口調の彼の言葉に小さく歯噛みする。…2年しかたってない、なんて私は思えない。2年も経ったというのに未だ、私がいない時は彼独りだけが前に出て戦っている。部外者である私でさえ隊に所属しているにも拘らず、だ。

「カーナは…逃げたいと思わないの？」
「思ったところで、逃げる先が無い。此処が初めで、最後。――駄目だったら。誰かを傷つけて、悲しませる位なら――」
「カーナッ」
それ以上、言わせない。
小さくカーナへ声を荒げると、「…すまない、忘れてくれ」と呟かれた。
彼と私は自身のせいで傷つく事を恐れている。
けれど、優先するものが違った。
私が優先するのは、あくまで私自身。私に降りかかるべき厄災が大切な誰かを巻き込み、奪われる事を恐れた。だから、私は大切な人を作らない為に逃げた。大切な人を巻き込まない為に、距離を取った。
彼が優先するのは――大切な人。大切な人の為なら、彼は捨てるのだろうとあっさり瞬きした瞼の裏に浮かんだ。
「…間借りする、という事は寝る場所が必要だな…なら、ベッドを使ってくれ」
話を変えるように、彼がベッドを指し示す。一度も使われていないベッドは、誰かが掃除しているのか埃をかぶった様子が無い。――彼が使えば、1日で寝具が駄目になる。その代わりに傷だらけの壁が寝具の反対側に存在している事から、普段寝ている場

所がそこなのだろう。立ち上がり、向かおうとする彼よりも先にその隣を陣取ると、困惑したようにカーナがつぶやいた。
「…何故自ら寝心地の悪い所に？」
「…それは私の勝手よ。それとも、安心できないのかしら？」
溜息。
そのまま何時もの場所へ背を預け――――寝息が聞こえた。
「…おやすみ、カーナ」

危機契約モデル＃1：序盤三重奏

目を覚ます。

隣にはスカジが此方の右腕に頭を預けて寝ていた。本来なら我の髪で切り傷位つくはずなのだが、彼女には一切の傷が無い。それはひとえに彼女が深海の水圧環境に適応しているからだろう。

彼女を起こさないように、抱き上げる。見た目に反した重さが腕に帰ってくるが、何の問題も無い。体格と筋力に恵まれて良かった等と思いながらも彼女をベッドへ横に寝かせる。

「…、…――――」

そっと、頭を撫でる。爪は当たらないよう、手の平で彼女の頭をなぞる程度。

…時計を見る。あともう少しで見回りの時間だ、そろそろ準備をしなければ。ケルシー先生曰く”アーツの暴走であっても本人に影響しないペンギン急便の先鋒オペレーターが保有する源石剣は本人を傷つけないのと同じ、らしい。我はそのオペレーターと遭った事が無い為分からないが、自身のアーツで自壊する事は出来ないという事だろう”らしく、予め我のアーツ精密に言うとアーツによって強化された髪の毛や爪だ

が、今後はアーツと一括するに耐えられる合金製であれば私生活も送れる。
身だしなみを整え、爪においては1層を残して剥ぐ。月に一度、１４年近くもやっていると痛みに慣れる。
準備が終わり、離れから出る。
「…おはよう、スワラチカ」
「おはよう、ロスモンティス」
何処か不機嫌そうなローズマリーが声をかけに来ていた。…恐らくはスカジが離れを間借りしているのを何処か恐らくはケルシー先生から知ったのだろう。ケルシー先生はアーミヤＣＥＯやローズマリー等一部のオペレーターには甘い傾向がある、あり得ない話ではない。
だが――――カーナではなくスワラチカと呼んだ。即ち仕事だ。
「場所は?」
「炎国西の荒野。メンバーは私、スワラチカ、ケテル撃破型先鋒オペレーター。精神干渉による士気高揚と対象の錯乱を得意とする、ススヒト群攻前衛オペレーター。対多数戦及び陽動を得意とし、非常にタフ、ワルファリン、レッド。指揮については――――」
「分かっている。我が遊撃で、他が部隊…だろう?」
彼女が小さく頷いたのを確認し、中へ引き返す。そうなると移動用ヘリに乗る為の対

内防御を目的とした装備が必要で――――それはとても暑い。炎国という地理も関係している為、着心地は最悪だろう。

だが、我はこの時しかエリートオペレーターとして働けないのだ。文句も何もない。

そう言い聞かせ、着込んでいく。準備は特に滞ることなく、ローズマリーと共にヘリポートへ向かう。既に４人がヘリポートで待機しているのが見えた。

「皆、おまたせ」

「離れだから仕方ないっすけど…緊急時において、誰かが呼びに行かないとならないのが面倒っすね」

眼に包帯を巻いた、赤毛のリーベリの青年ケテルが呟く。

「爪が無い時ならまだしも、爪があると通信機器が斬られてしまう故。…爪においては毎週剥いでしまうのも手か…？」

「無理しちゃ、駄目」

「…冗談っすよ。てか、昨日まで3層になってた爪が1層になってるのはそれっすか」

領くと呆れたように溜息を返された。

「時間だ、乗ろう」

外見からはどの種族であるか予想の付かない男性ススヒトがヘリの扉を開けながら促す。後ろから離れずに付いて行くレッドに続いて、我々も乗り込んでいく。

作戦については単純。

敵本隊が出撃した後の敵防衛隊をケテルが誘引し、我が撃滅。ロスモンティスが此方を援護しながらも本隊に連絡を取り合い、帰ってくる敵本隊及び残りの防衛隊を全員で迎撃。この際我はロスモンティスの視界から消えない立ち回りを前提とする。レッドにおいては暗殺及び全戦場を走るとのことだった。

この際、防衛隊を内部から引きずり出す為にケテルがアーツを使うというが…

「ロスモンティス、今は戦場から離れろ。ケテルが帰ってくるまでは出撃するな」

「…どうして？配置コスト配置するための準備に必要なコスト。依頼国からの支援で補給物資が定期的に届くが、環境の整備や準備等も此処に含まれるが高いのは自覚してるけど…」

「…あー、俺のアーツによる精神錯乱が普通にやばい部類っすからね。たぶんスワラチカはそれを見せたくないんだと思うっす」

その言葉に頷き、ローズマリーを見つめる。暫くすると不承不承ながらも彼女は頷き、補給物資を受け取る為の仮拠点へ引き返した。

「じゃ、やるっすよ」

――――目元の包帯を外し、拠点内部にいる１人を目視した直後。

内部から響く悲鳴。彼のコードネームを呟きながら錯乱しクロスボウから放たれる太矢の刺突音、ナイフによって重いものを斬り捨てたような音、槍が同じものに複数突き刺さる音、切れ味の悪い刃物が肉塊を殴り斬るような音。精神錯乱によってもたらされるのは1人を感染媒体とし、感染媒体の攻撃で感染させて広範囲に及ぶ同士討ち。そしてそれを認識できるケテルが依頼国へ直接撃破報告を送り、支援物資を大量確保する事でコストを稼ぐ。

「本当、あんたには何の影響も出ないんすね」

「制御はできるようになってるのか？」

「ええ、オレの場合は敵という被験体が居てくれたっすし、フィリ姉からのアドバイスもあるっすからね。今回はその制御を放棄してるっすけど…あんたも敵を被験体としてやってみたことは無いんすか？」

やったことはある。然し、一度とて成功せず、現状維持のほうが余程ましという結果まで出てしまった。その意図を込めて濁った眼を向ければ、ケテルも察したらしく

「あー…」と苦い表情を浮かべた。

「そんじゃ、オレは仮拠点に戻ってロスモンティスさんを呼ぶっすね」

「あぁ…お疲れ」

目元に包帯を巻き、通信機器と伸ばしたワイヤー線を収納指輪へ押し込んだ後走って

いく。中から錯乱した感染者が見受けられるが――――既に同士討ちで息も絶え絶えだった。

「…おま、えが？」

「客に種を明かす手品師がいるか？」

「…っへ…殺して、やる…」

軽装兵が切りかかる。それを鞘で受け、納刀された刀で頸を撥ねる――――次に迫る兵士諸共。２人目はどうにか盾で受け止め、此方へ反撃を加えようとする。それに対し、背を向けながら納刀し直し

「…っな？」

鉈が、髪の毛によって阻まれた挙句に２人目の目を輪切りにした。３人目はそれを見て、脇に抜けようとする。

大雑把に、１回転。

髪の毛が舞い、ただの鉄の塊を斬り捨てる。下半身と別れた上半身は、どうにか這って進もうとしていたので鞘で頸を潰す。

通路は奴らが整備した場所をそのまま利用している。その上で言うなら炎国の国防が周囲を封鎖している為、我々が用いている仮拠点から以外は脱出も儘ならない。とはいえ、敵から不審に思われないよう脱出路と思われる場所に兵を伏せてもらっているだ

けだが。

1対1から、徐々に此方へ手を出す人数が増えていく。物量で押され続ければ、我とて厳しいものがある。射手が見え始めたあたりから、少しばかり余裕はなくなるが――問題ない。唐突な1回転で複数人を負傷させながら防衛ラインを後ろへ下げる。飛んできた矢が腕に突き刺さるが――どうにでもなる。

「…始まる」

――大丈夫？

ローズマリーの声が脳裏に直接聞こえた後、背負うユニットが我の目の前に着弾した。それに巻き込まれる形で数人が無造作に吹き飛ばされる。直撃した数人においては部位が潰され、激痛に悲鳴を上げていた。

――問題ない。左右に頼んだ。

――ん。

思念で彼女に返し、ユニットを2本我の左右に着弾、配置してもらう。大雑把ながらもこれで護身は完成。ユニットに阻まれ通り抜けられず、破壊しようとする2人へユニットが跳び、無造作に頭から拉げさせた。

新たに配置されたユニットを破壊しようと、敵からの攻撃が集中する――が、我を忘れるのはどうなのだろうか。ユニットを掴み、大きく振り抜くことで首から上を血霧

に返す。
――ユニットの強度は大丈夫か？
――敵の攻撃も集中してるし、カーナのアーツの影響もあって厳しい。
――戦線を下げる。抜けようとした敵を頼む。
――うん、わかった。
地面に配置されたユニットが彼女の元へ戻っていく。その間に我は再度戦線を下げ――１本道を封鎖するような形で立ちはだかる。ローズマリーは現状無事なユニットでのみの援護となるが――この狭い通路ならば十分だろう。
さらに１２人ほど排除したところで。
――敵本隊が帰ってきた。
――了解だ、ロスモンティスも
何処か、悲しそうな表情が視界の端に映った。
――ローズマリーも気を付けて
――うん。

喧噪の掟＃０：太陽偲ぶ月（グラニ）

「あ、アーシェ！騎馬警察の業務時間直に終わるから待ってて！」
　中から快活な少女の声が響き渡る。其方に目を向けると小柄なクランタの少女、グラニが此方に手を振りかけている。軽く手を振り返した後待ち続けるのを、僕は俯瞰していた。
　随分と懐かしい…1年前、まだヴィクトリアの騎馬警察に所属していたころの記憶だ。だからすぐにこれは夢だと分かった明晰夢、だっけ？。
「おまたせー！アーシェ、今日の見回り楽しかったねー」
「業務、というのは分かってるからいっか…僕はあまり感じないからなぁ」
　業務を楽しい、と自ら率先してこなすのはグラニ位ではなかろうか。少なくとも僕自身は業務に対して特に娯楽性を求めていない。時折サボっている同僚及び先輩方の顔面に拳を突き刺し、手早く効率的に物事を済ませるようにはしてたけど。
「そう言えばそうだっけ」
「仕事が無くなれば上から何も言われないからね」
「あー…でも、他の人の業務を手伝ったりはしないの？」

グラニの問いに嫌そうな顔を返す。
「鉱石病より腐りきった同僚は御免だよ。真面目にやってくれる同僚ならやぶさかでもないけどさ」
「あ、てことはあたしは真面目にやってるように見てくれるんだ！」
「そりゃね。もしグラニが仕事してないと言う馬鹿がいるようなら性根が源石病にかかってるよ」
右こぶしからバキボキと音を響き渡らせつつ笑顔で返す。それに対してグラニは少し引いたような笑みを浮かべていた。
当時騎馬警察の中でも腐敗が酷かった支部に、グラニと共に配備された。グラニに突っかかる奴らが居て、それを助けて以降の付き合いだ。今ではグラニの頑張りが認められ、騎馬警察と言ったらグラニの名が上がる程度には市民から人気を集めている。……今も太陽のように、元気でやっていればいいなぁ。
「アーシェはどうして騎馬警察になったの？」
「唐突だね…何で今気になったのさ」
「んー、興味本位かな。興味なんて降ってわいてくるものだしねー」
改めて考えてみる。正直給料は然程良くないし、騎馬警察に拘りはなかった。なんならウルサスの軍人でも、龍門近衛曲の近衛兵でも、傭兵でも。

ただ、あえて言うなら。
「今は君が理由かな」
「え、あたし？」
「うん。グラニが良くした街を守りたい。とは言っても僕ができる事はさほど多くないし、守るというほどの事態も来てないから」
あの当時は、よくもまあ言えたと思う。たぶん僕自身がグラニに対して抱いてた感情を認知出来てなかったからだろうけど、今じゃ言える気がしない。
「…なんていうか…照れ臭いね、そう言われると。アーシェ、一切の冗談も言わないし」
「冗談を言えるだけのユーモアが無いから、せめて誠実であろうと思ってるだけだよ」
「あたしが揶揄われていた時の”次ふざけたら別所に追い込んでやる”を本気で実行したもんね…因みにあれってどうやったの？」
「あれらが引き受けていた業務を全て受けただけだよ。結果として必要人員が減って、その中でもサボりがちだったあれらが飛ばされた」
今思えば、一目惚れだったのかもしれない。グラニ以外ならその現場を見ても自身の業務に戻っていただろうし。
「なんというか、アーシェらしいね…ねぇ」
「うん？」

「あたしが良くした街をアーシェがこれからも守ってね」
頷く。…その半年後に天災が訪れ、グラニを庇ってシラクーザ迄流され。今では――
―

――龍門サンセット通りのとあるバー、裏口に一番近い汚れたテーブル
――Ｐ．Ｍ／１１：３７　天候：曇天
剣呑な空気を覚え、目を覚ます。その先にはスペードのストレートフラッシュイカサマするならフルハウス程度にしたうえで一定の花を相手に持たせろとブタイカサマしかける相手へ対策無しにポーカー挑んでいるお前は馬鹿の手札を持ちながら言い争う上司二人。関わらないよう、カウンター席へひっそりと向かう。
ごめん、グラニ。今じゃ騎馬警察じゃなくてマフィアの幹部候補だから敵対することになる。
そして持ち出されるのは昨夜の処理の話。カボネが我が物顔で語ってる話、処理したの僕と僕の部下なんだけど。
それを言われ口を荒げるガンビーノ。いくらバーであってもその声量は違和を抱かれる。何も知らない周りから見たら手元のカードの差が酷すぎてイカサマ疑って突っかかっているシチリアン。尚イカサマをしていると思われる第三者に決してやらせよ

うとしなかったし相手もシチリアン。

口論が激しくなっていく2人に溜息を吐く。嗚呼、無関係ならよかったのに。

「こんなところでガタガタやってんじゃねぇ!タダでもこのマズすぎるシャンパンにイライラしてんのによ。邪魔くせぇ、空き瓶でも持って表でやれや」

「…そうなんです?あ、僕にもこの人と同じシャンパンをください———え、資産は大丈夫か?値段だけ聞いても———」

ガンビーノの言葉を無視して店員にシャンパンの値段を聞き無言となる。このペンギンよりによって6桁のシャンパンをマズすぎるってどれだけ舌が肥えているのだろう。

「お前ガキだろ、ジンジャーエールで我慢しな。それと俺のこの店でそんな口利くなんて言い度胸じゃねぇか」

「まあ興味本位で。でも暫く戻れる目途も無いですし、その間に非行ぐらいしておきたいじゃないですか。未成年で飲酒は未成年だからこそできる物ですよ?お酒は二十歳になってからあ、其方のおごりであればごちになります」

「つかー!!いうねぇ坊主!そいつら2人が共倒れした時後見人として引き取ってやりたいぐらいだ」

「おいロウロウ!俺が拾った事の恩を忘れて何のうのうとしてやがる!」

「その恩でこのシャンパンの２０倍の龍門幣を要求したのは返したはずですがねぇガンビーノ。恩着せがましい上司共を持って此方不快値指数うなぎ上りですよ。それどカボネ、我が物顔で僕がした後始末語ってるの一番鼻にキました」

ガンビーノがわめく中、カボネは此方を睨むだけで黙ったまま。隣のペンギン龍門であれば圧倒的知名度だ、下調べもしないボスが一番悪い。僕を含めた制御しない幹部組は二番目だ。

「あぁ？」

「老舗って感じが僕としては好きなんですけどね…まあ、上司方は分からなかったみたいですけど」

「誰の趣味が悪いって？」

「あ、これ僕も巻き込まれる奴じゃないですか。何してんですかボス」

「カボネ、何故此奴を龍門のマフィア幹部候補にした!?」

「アンタへの当てつけだよ――――ってそれどころじゃねぇなこれ、ロウロウ足止め任せた。ボスは早く行くぞ」

舌打ちした後２人はバーの外へと走っていった。なおそのバーのカウンターから咄嗟に離れた直後――――４人の少女が、カウンターの裏から現れる。

「僕、このやり取り何度やればいいんですかね？教えてくださいよシアさん、クロワッさ

ん、テキさん、ソラさん。あとソラさん、先日の折誠に申し訳ありませんでした」
「いやー、君が上司二人をしばけばいいんじゃないかな?それよりペンギン急便来ない?君なら歓迎するよ?」
赤髪のサンクタの少女、エクシアがそんな事を宣う。心の底から”まだ来てほしくない”と思ってるのは察してる。
「あんなのでも僕を拾ってくれた命の恩人ではありますし、命を守る程度の恩を返すまでは無理ですよ」
「そっかー、それは残念。ちなみにソラに何をしたの?」
「仕事疲れにベンチで横に――」
「わーっ!?ロウロウ君、それ言っちゃうとあたし炎上しちゃうからダメッ!」
黄髪のループスの少女、ソラにそう言われてしまい、「すみません、言えないです」と返す。…会話している間に2人の姿が見当たらないが――先鋒と重装だ、予想はついてる。
「隊列β、射撃戦構え」
「ッ」「うっそぉ!?」
灰髪のループスの少女、テキサスと橙髪のフォルテの少女、クロワッサンが入り口から出ようとしたのを封鎖し、腕に付いた鎖状の源石で受け流す。そして直後2人と裏口

へ向かうエクシアとソラの足元へ”アーツで出来た人型のクロスボウによる射撃”が飛び、足を止めた。正面の２人も咄嗟に回避する。

「すみませんね、１０分だけ足止めします。…はぁ、仕事だから仕方ないですけど…何故貧乏くじなんですかね…」

危機契約モデル＃1：中盤四重奏

「ただいまっす」
　オレから声をかけると仮拠点で待つ3人が此方を向く。そのうちの一人であるススヒトが声をかけてきた。
「よく戻った。スワラチカが戦闘を始めた頃合いか？」
「そうっすね。あの人の配置コストって結構高い筈っすけど…オレの自主撤退と討伐報告によって稼いだコスト自己撤退した場合、コストの消耗を発生させない。この特性は武器の摩耗を抑える事に長けた先鋒オペレーター、或いはタフな先鋒オペレーターが保有しているで足りたのが救いでしたっす」
　それに対し、ワルファリンが首を横に振る。
「あのものにおいては、ロドスの医療を受けていないも当然でな…エリートペレーターとしての給金を、補給物資としてロドスから送ってもらう事で初回に限って配置コストを大幅に下げておる」
「感染者なのに、受けていない…？それなら、普通は重傷なんじゃないっすか？」
「普通じゃない、そういう事だろう？ワルファリン」

　ススヒトの言葉にワルファリンが頷いた。そのままススヒトがロスモンティスへ眼を向ける。
「ロスモンティス」
「命令を出して、完璧にやってみせるから」
「スワラチカを高台から援護。その際、ロスモンティスの指揮権を己からスワラチカへ。スワラチカが撤退するようであれば、此方に連絡を」
　それにロスモンティスが頷き、戦術装備を背負って飛び出す。それと入れ替わるように、血濡れとなったナイフを持つレッドが仮拠点の上から飛び降りてきた。
「狩ってきた」
「お疲れ、レッド。次に備えてくると良い」
　ススヒトの言葉に、振られていたレッドの尻尾が力なく垂れる。…ワルファリンを見ると「この鈍感め」と呆れたようにつぶやいていた。レッドの様子目に見えて落ち込んでいたにいたたまれなくなり、ススヒトに耳打ちする。
「(ありがとうと、一撫で位してあげてもいいんじゃないっすかね？幸い時間もあるし、ワルファリンとオレは帰ってきた敵本隊の先行迎撃準備でもしておくっすよ)」
「(…む、ならば頼もう)」
　ススヒトから許諾を得て、ワルファリンの手を掴む。

「む、なんだケテル？配置までの時間的余裕はあるはずだが――――」
「ススヒトからも許可を貰ってるっすから、速く行くっす」
流石にススヒトも人が居るとレッドを甘やかしにくいだろう、仮拠点からワルファリンを強引に連れ出した。
「む、わかった。分かったから思い切り手を引くでない！」
「こっちの方で医療器具を持つのも手伝うっすから、ハリーアップっす！」

患者であるケテルにより、妾も敵本隊が帰ってくる前段階で配備される。
「…全く、速すぎるではないか。転びそうになったぞ」
「それについては悪い事をしたと思ってるっすよ。でも、流石にレッドがいたたまれなくてっい」
…ああ、妾を連れ出したのはススヒトとレッドへの配慮か。
レッドと年齢が変わらぬにも関わらず、機微に敏い。精神干渉のアーツを保有する、という事からだろうか。
「あの鈍感に気遣った結果…か。ならばよい。妾とてススヒトの鈍感にはやきもきしていた」
「…？そうなんすか？」

「そう。レッドとて9年も片想いし続けているにも関わらず、ススヒトはとんと気付かない」
「…スワラチカとは逆っすねぇ…」
首を傾げる。スワラチカについては正直分からない。
何せ一般の鉱石病患者と違い命の危険性が無い感染者――――ロスモンティスと似たような存在である。妾が鉱石病を治療する医者である以上、このように時たま戦闘で同伴するぐらいしかない。
「妾から見るとススヒトとスワラチカは同じように見えるがな」
「まあ、傍から見ればそうっすね。ただススヒトは言う通り鈍感で、カーナ…いや、スワラチカは気付いた上で気付かないふりをしているっすから」
「…スワラチカ、殊の外に質が悪いな？」
思わずつぶやく。対してケテルは「そうっすね」と同意を返した。
「ただ、離れという物理的に距離を取る理由位はワルファリンも聞いてる筈っすよ。だからこそ――――」
――――足音。それも、かなり多い。ケテルは言葉を止めると同時に収納指輪からワイヤーを必要な長さ迄引っ張り出していた。
「っと、来てしまったっすね」

「そうだな。…まあ、使っても問題ないだろう」
　手元の輸血パックの封を口で千切り、飲み干す。ケテルはそれを気にすることなく合計１０本のワイヤー線を構える。…戦士の面構え、と言う物だろう――――戦闘時におけるススヒトの面構えに、よく似ている。
「輸血準備！」
　相手からの攻撃を受けると同時、血を織り交ぜた医療アーツを彼に投与する。ワイヤーで斬りつけ、時には拘束したまま締め斬る。…何処か困惑しているのが伺えた。
「…どうした？」
「あぁ、いや。あんたのアーツの影響っすか？疲労が酷い代わりに妙に力が篭るというか」
　頷く。妾が不安定血漿と呼んでいるそれは投与者の運動能力を引き上げる運動する際の頻脈をアーツによって再現することで、疑似的に運動能力を向上させる原理。但し血漿投与者、即ち妾と対象にかかる肉体的負荷は大きくなる。その感覚に慣れないと、確かに困惑を覚えるやもしれない。
「気になるなら、通常の医療に戻すが」
「正直助かるっす。今ならオレ以外が、間違えて同士討ちに巻き込まれることも無いっすしね」

ケテルが包帯を外し、一人を睨む。
直後その1人から始まる同士討ち――その症状は、妾が滅びを確認したはずの一族が保有するアーツと同じだった。
「…気にするよりも、まずは目の前の戦場か」
「ワルファリン」
「わひゃっ!?」
背後からの声に驚き、振り向く。そこにはレッドが首を傾げながらもそこにいた。
「…驚いたぞ…ススヒトからの言伝か？」
頷き。
「スワラチカ・ロスモンティスが一度撤退。最終防衛ラインは、仮拠点前の２本通路」
「了解だ。レッドはどうする？」
「ケテルとワルファリンの撤退援護」
大剣を後ろ手に、短剣を前に構えつつも3人を待つ。
『ススヒト、スワラチカから”２本通路の片方を封鎖する”だって』
「分かった。…敵防衛隊の動きは？」
『指揮系列が無いのか、混乱している』

ケテルのアーツ発動後にレッドに指示を出し、敵陣営内部で指導者だけを討ち取って撤退してもらった影響だろう。烏合の衆ならばスワラチカが残る事を選択しても問題なく対処しきれるはずだ。

他愛もない話を続ける。

暫くすると、正面から2人ワルファリンとケテルだ。ケテルはワルファリンの撤退援護をしているようだ。…レッドが見当たらないが…が此方に来ているのが見える。

その後ろには、小規模ながらも砂塵が舞い上がっていた。

「…敵本隊が来た」

『分かった。スワラチカは任せて』

それを最後に通信が切れる。切れた直後に、先にワルファリンがすれ違いざまに此方に声をかけてきた。

「ススヒト、妾はケテルと共に準備を済ませてくる。レッドは既に潜伏済みで指示を待っている状態だ」

「分かった。それまでは持たせよう」

ワルファリンが仮拠点へ走っていく。ケテルもそれに続き———

「帰ったらレッドを誉めてあげるんすよ?結構頑張ってるっすから」

「…善処はしよう、速く準備して来い」

その一言だけを残し、仮拠点へ走る。以降見えるのは見慣れない装備――――即ち敵だ。

鉈の一撃を短剣で弾き、空いた胴に大剣を叩きつける。後ろから続くクロスボウの射撃を、刃の食い込んだ敵諸共大剣で弾き、大剣の死角より走り抜けようとしたステルス兵の首を短剣で掻っ切る。

何れも基礎ですら完成していない粗暴な物でしかない感染者の中に従軍経験のあるものは少なそうだ。数は脅威であるが、１人１人の力は確実に弱い。一撃で奪命し、屍を左右の山として行く。

８人ほど斬り捨てた頃に、後ろから巨大な人型が迫ってくる。それが纏う甲冑を見る限り物理的な攻撃は通りが悪いだろう苦労させられそうだ。隊長でない隊長であればレッドの奇襲で弱らせた後手早く仕留める事で指揮を阻止したいのなら、スワラチカかケテルに投げてしまいたいスワラチカはアーツによって鉄の塊程度なら斬り捨てる事ができる。ケテルにおいてはそもそも精神干渉の為物理的な影響を受けないところだが…

「…た、隊長！アイツです！あいつが、仲間たちを――――」

「レッド」

「もう逃げ場、ない」

足場が悪いにもかかわらず、隊長の下へ一瞬にして飛び込み甲冑の隙間の生身に黒いナイフが6本突き刺さった。敵隊長の苦悶の声に、周囲の兵士たちが固まる。
だが、隊長はそれを気力でねじ伏せてレッドへハンマーを振り下ろす。
――既にそこにレッドはいない。新たに6回、肉に鋭い何かが突き刺さる音と共に赤い影は戦線から消えた。
「隊長ぉ!?」
「つぐ、ま…だだッ!」
巨大なハンマーを杖に、迫ってくる敵隊長。…流れていく血は徐々に減り、レッドの付き刺したナイフに黒い結晶源石。随分とステージが上がっている感染者のようだが纏わりついていた。源石で止血し、止血した源石を介してアーツを発することで運動能力を強化したらしい。
「なぜ、ロドスは感染者なのに炎国に付く!あいつ等から始めた、迫害を!」
「炎国から発された危機契約天災トランスポーター達によって結成された、危機的状況で救援を求める人へ救援可能な実力のある組織を仲介して、救援を求める人達の代行として相応の報酬を渡す非政府組織。履行の為」
「危機契約――っは…結局のところ、ロドスは金の亡者か!感染者を助ける、そんな綺麗事の裏で脂ぎった紙幣を受け取ってる!俺達という感染者の犠牲を代価に!」

屍の山に新しく肉塊を突っ込む。
…反対側の通路からも悲鳴が響き始めた事に相手も気付いたのだろう。死兵となって此方へと迫ってくる。
喚き散らす隊長と、それに同調する隊員。あまり聞いていて心地の良い物ではなかった。それは――ケルシーから炎国に対する交渉の顛末を聞いているからだろう。
「ロドスはこれでも殲滅ではなく鎮圧で済ませようとした。だが、炎国はそれを認めなかった。聞こう――感染の迫害を理由にして非感染者をどれだけ食い物にした？」
「…そ、…れは…」
死兵となって迫る中、その一言で動きが鈍った者が数人いた。
それらにおいては此方の勝手な判断で死にはしない程度の致命傷を負わせた後、屍の山に追いやる。
「あいつ等の民は、感染者を追いやった！なら俺らだってやり返す権利はあるはずだ！」
「成程、ならそこからさらにやり返されることも考慮済みなんすね」
「っひ、あい――けてるけてるけてるけてるけてるけて――」
「ケテル」
軽い口調で、一切目の笑っていないケテルが隣に立つ。再度包帯を巻きなおしたために、その怒りが見えたのは一瞬だった。同士討ちによって始まる混乱に乗じ、己が生か

した数人を回収してもらう。
「ワルファリン」
「此処にいる」
「屍の山の傍に気絶した奴らがいる。そいつらだけ、レッドと一緒に回収してくれ」
２人が、動く。その間に――躊躇わなかった奴らと、黒い結晶に覆われつつある隊長が迫ってくる。その眼には狂気とでもいうべき物が宿っていた。

危機契約現行：間奏

――危機契約履行前日
――Ｐ．Ｍ／２３：１８

「これより、炎国から発された危機契約についての話し合いを始めます」

私の声とともに張り詰める空気。現在この場にいるのはドーベルマン教官、ブレイズさん、Ａｃｅさん、ケルシー先生、Ｓｔｏｒｍｅｙｅさん、ススヒトさん、そしてオーキッドさんとヤトウさんの８人。…ドクターが座る席が空いているのを見ると、小さく心が痛んだ。

「初めに言いました通り、今回の危機契約は炎国より発されたものとなります。概要としては”感染者たちの組織だった行動によって住民が犠牲になっている”とのことです」

一息置く。

「これは私たちが掲げる”感染者問題の解決鉱石病の治療と感染者が起こした事態の収束”に関わります。その為、現在レム・ビリトンヘロドスを走らせてますが北上して炎国へと路線を変えようと思ってます。これについて何か意見はありますでしょうか？」

８人は特に意見はないらしい。
「無い、という事で大丈夫ですね？」
「少なくとも、己からは特にない」
ススヒトさんの一言に続く形で、それぞれが私の意志を尊重してくれる。それが何よりもの救いで、支え。
「有難うございます。続いて、手元の資料を見てください」
ＰＲＴＳロドスの業務用ネットワークシステム。の端末を操作し、スクリーンにも手元の資料と同じ画像を映し出す。その画面に映るのは今回の作戦環境と、敵の編成。そして契約。
「左側が相手の本拠地で、右側が問題となる感染者たちの拠点外部迄の通路となります。本拠地と強奪の隊でそれぞれ隊長と思われる人物———資料では暗殺者とクラッシャーが確認されているようです」
「暗殺者は…見た感じサルカズね。アーツによる通りは然程期待出来なさそう」
オーキッドさんからの呟きを聞き、ＰＲＴＳを通じてメモを取る。術が聞きづらいとなると、物理的に相手を倒す必要が出てくる。或いはスワラチカさんのような、物理的な装甲もアーツへの耐性も無視して切り裂くか。
「ならレッドに暗殺を託そう。ケルシー、構わないか？」

「ああ。彼女には私から話を通しておこう」
「んー…見た感じ私が出るのは厳しそうかな。機動軽装兵が多い以上、アーツを併用した攻撃のない私よりも、スワラチカが適任に見えるよ。あの子、なんでも切り裂いちゃうし」
「私からも同感です。それに、スワラチカの昇進を見定める良い機会だと愚考しますが…」
「？どういう事かな、ヤトウ」
ブレイズさんの言葉に、ヤトウさんが返す。
「これを機会に職員方のスワラチカに向ける不満を解決できたらと」
…確かにスワラチカさんは基本的に感染者の保護等は出来ず、大型感染生物への対処を始めとした”方針に沿わない戦闘”を業務としていた。エリートオペレーターの中で唯一ロドスの方針に貢献してないと職員たちの間で囁かれるほどに。
「確かにそうだな。この危機契約を成功させれば、職員たちが向ける不満もある程度は解決できる。…十全に解決は難しいだろうが」
「そう、ですね。離れという環境も、職員からすれば特別なように見えるのでしょう。医療部門の人達は――――」
「残念ながら、感染者の中で命に関わらない発症というのもあって軽視されている。見

た目は完全な感染者のそれにもかかわらずな」
「胸糞悪い話だな…」
　Ａｃｅさんの溜息が、重く響く。スワラチカさんは、言うなればロドスにおける被差別対象にすら近い存在だった感染者からは命の危険性のない”なんちゃって鉱石病”、非感染者からは無作為に切り潰して駄目にする”シュレッダー”。…だからこそ、グレースロートさんとすぐ仲良く出来たのだろうけど、不憫だと思う。彼は何一つ悪くないというのに。ロスモンティスさんも似てはいるが、彼女は職員方からの信頼を自ら得ている為、寧ろ好意的に見られている。彼自身も信頼を得ようとしていたが…アーツの制御中枢が存在しない以上、どうしようもない。スカイフレアさんからの言葉であっても、それを信じたくはなかった。
「ヤトウは職員からスワラチカへの印象回復の為に参加する、ってことでいいのかしら？」
　オーキッドさんの言葉にヤトウさんが頷く。ブレイズさんの発言――――機動装甲兵の対処も兼ねた印象回復は確かに良い案かもしれない。
「俺からも賛成だ。そうなると重装オペレーターとして配置コストを２人で食うわけにもいかねぇし、俺は留守番だな。」
「…そうなると私も出るわけにはいかないか」

「敵にドローンも居ねぇんじゃ、俺も仕事は出来なそうだな…むしろ契約の中に”火力減衰”迄ありやがる。ＣＥＯ、今回はどの等級まで目指すんだ?」

少し考える。資金運営等も、実のところあまりよくない。その上でスワラチカの昇進の為に必要な素材――彼の装備で重要なのは”鋭角を喪失しない事”。金属としての強度があればあるほど良い。

「なるべく上を目指すつもりです。資金運営とスワラチカさんの昇進の素材の確保の為にも」

結果として等級は１８程度で落ち着く事となった。１８もあればスワラチカの昇進及び資金運営も持ち直せると、アーミヤが言っていた。彼女の言葉を信じよう、もしもの時は■■■から引き下ろせばいい。

レッドに「明日の朝、ケテルとワルファリンへ出撃を頼む。レッドも明日の朝に出撃だ」と言伝をする。その際に「ススヒトも一緒だ」と言ってやると彼女の足取りは軽くなった。

続いてローズマリーの部屋へと向かう。ノックをした後、しばらくして中から彼女が出てきた。

「あ…ケルシー先生、だよね」

「あぁ。今時間は大丈夫か？」
「うん。大丈夫、少し記録とかで散らかっちゃってるけど…」
　そこまで時間を取る事ではない為、首を横に振る。
「明日の朝８：００、発令された危機契約の参加メンバーにローズマリーも選ばれた」
「うん、わかっている。私がオペレーターのみんなを守るよ。絶対に」
「それは心強い。それと、カーナにも明日の朝声をかけてくれ。彼もメンバーで、この危機契約が成功すれば昇進する」
　小さく見開いた後、自分の事のように喜ぶ彼女。…エリートオペレーターとなる前はあれほど毛嫌いしていたというのに、良くも悪くも変わった。何処か、彼に依存している節もあるのは…多分気のせいではないだろう。
「漸く、だね。これで、職員の皆にも認められるかな？」
「そうだな。…それと、スカジが依頼を速めに終わらせてたな。宿舎が空いてないから、カーナの離れに向かうと言ってたが」
　それを聞いた途端、何処か不満そうに「…とーへんぼく」とローズマリーが呟く。…そんな彼女に老婆心ながらも助言をしてみる。
「スカジが離れで一晩過ごしたとなれば、それを種にローズマリーも離れで過ごせるかもな」

「…でも、それはずるい気がするよ」
「するかしないかは、ローズマリーに任せる。良い夢を」
「うん、ありがとう。ケルシー先生も、おやすみ」